

Café des open

Menu 第5回



三浦一族

和田合戦

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

今回は、鎌倉の市街地を舞台に繰り広げられた和田合戦について紹介します。和田合戦は、建暦3年（1213）5月2日、侍所別当であった和田義盛が拳兵し幕府を襲撃した事件で、翌日鎮圧されるまでの間に数千人の死傷者を出した鎌倉幕府最大の内紛でした。

この戦のきっかけは、泉親衡（いずみちかひら）という信濃の武士が、源頼家の子を擁立して謀反を企てたことに始まります。安念という僧侶が捕えられ、謀反に関与していた者の名を自白します。そのなかにも、和田義盛の子の義直及び義重、甥の胤長（たねなが）が含まれていました。義盛は、所領のある上総国から鎌倉に参じ、將軍源実朝と対面し弁明します。結果、義盛のこれまでの功に鑑み、2人の子の罪については赦されましたが、胤長だけは赦されませんでした。この処分を不服とした義盛は、翌日、一族98人を引き連れて御所に参じ、胤長の赦しを願い出ます。しかし、執権北条義時は、胤長は謀反の張本人であるとの理由から赦さず、一族の面前で胤長を縛りあげ義盛に恥辱を与えたのでした。一方、罪人となった胤長は、陸奥国に流罪となり、所持していた荏柄天神前の屋敷地は没収されますが、没収された所領はその一族の者に優先して引き渡されるという当時の慣例があり、義盛に引き渡されました。ところが、間もなくすると、義盛の代官は追い出され、義時はこの地を自身の配下の者に分け与えてしまいます。義盛は、こうした行為を義時による挑発と受け止め、ついに拳兵するのです。

以上が『吾妻鏡』に記された和田合戦に至る経緯です。しかし、最近の研究では、この『吾妻鏡』の記述は脚色されたものではないかという見方も出ています。そもそも義盛は、2人の子息の罪を不問とした幕府の対応に満足しており、不満をもつ一族内の若者らの声を抑えきれず彼らの旗頭とされてしまった結果、翌日胤長の処分軽減の嘆願に出ざるを得なくなったとの指摘がなされています（※1）。また、義盛の拳兵は將軍の命により幕府軍に追討されかねない状況に追い込まれていたためとの指摘もあり（※2）、その背景については、義時による挑発という見方だけでなく、こうした指摘を含めて見直してみるのもよいかもしれません。

さて、拳兵した義盛でしたが、ここで最大の誤算が

生じます。味方であったはずの三浦義村が離反するのです。『吾妻鏡』には、三浦義村・胤義（たねよし）兄弟は起請文（きしょうもん、神仏への誓いを記した文書。違反の場合には神仏の罰を被ることを誓った。）を記し、義盛方につくことを約束するものの、直前になって義盛を裏切り、義時に拳兵の情報を伝えた旨が記されています。当初の計画が崩れてしまった義盛でしたが、5月2日夕刻、一族らを率いて大蔵御所（清泉小学校付近）などを急襲します。和田勢は、激しく攻め立て御所は炎上し、実朝は義時らとともに御所から法華堂（源頼朝の墳墓堂）に逃れるなど、当初は和田勢が優勢でした。しかし、翌日の明け方になると和田勢は矢が尽き疲労の色も濃くなり、由比ガ浜まで退却を余儀なくされます。その後、各所から御家人らが集まってきますが、彼らは実朝の御教書（みぎょうしょ）を見て義時方に加わったため、和田勢は劣勢となり義直や義盛らが討死し滅亡しました。義盛方に与した234名の首は、片瀬川（藤沢市）に晒されました。義盛がつとめていた侍所別当は義時の手にうつり、義時はすでに就いていた政所別当と合わせ、大きな力をもつこととなったのです。



和田塚

一方、義村は、この乱の結果、三浦一族の惣領（一族の長）として確固たる地位を確保します。義盛は、三浦一族では庶家でしたが、宗家の義村よりも年長者で幕府における地位も高く、また和田一族は宗家よりも相対的に官職の高い者が多かったために、京の都では義盛が「三浦ノ長者」と認識されていました。また、当時の公家の日記には、義盛と義村は「仇讐」（仇敵）と記されており、この合戦以前から一族の長をめぐり、両者は対立関係にあったとみられるのです。こうしたことから、義村は義盛に味方する形を取りながら、実は当初から義時方と内通していた可能性が指摘されています（※2）。

合戦後、義時は功労者として義村の名を挙げています。義村は直前で義盛を裏切ったのか、当初から義時方の内通者だったのか、その結論はわかりませんが、いずれにせよ義村の素早い行動が義時方の勝利に大きく貢献する結果となったのです。

参考文献

※1 高橋秀樹『北条氏と三浦氏』（吉川弘文館、2021年）

※2 山本みなみ『史伝 北条義時』（小学館、2021年）